●書学書道史学会
会報
第48号

令和7年(2025)1月15日発行
編集・発行
書学書道史学会
広報局
〒100-0003
東京都千代田区一ツ橋1-1-1
パレスサイドビル7F
(株)毎日学術フォーラム内
TEL (03)6267-4550
FAX (03)6267-4555
MAIL maf-syogaku@mynavi.jp

第34回 書学書道史学会大会を終えて

高橋　利郎

前回、大東文化大学を会場に第22回大会が開催されたのは2011年、いまだ東日本大震災の影響が色濃いころのことでした。あれから14年、第34回大会には228名もの参加者を迎えることができました。そのおおよそ半数は大東文化大学書道学科の学生で、会場校として特別に許可をいただいたものです。これからの書を支える学生たちに、書学書道史研究の最前線を体感する、絶好の機会を与えていただきました。

22回大会で会場責任者を務めた澤田雅弘元理事長には、今大会では記念講演をお引き受けいただきました。要旨はこの会報にご執筆いただいた通りで、講演録を来秋発行の『書学書道史研究』に掲載予定です。「書の人文情報学」をテーマにしたシンポジウムでは、中村覚氏と成田健太郎氏による共同研究、ならびに藤森大雅氏によるデジタルアーカイブ構築に関する成果と課題を軸に、書をめぐる人文情報学の可能性について報告と討論が行われました。研究発表は9件。意見交換も活発に展開されました。

また、書道学科と書道研究所を設置する大東文化大学では、各種の書道関連資料を所蔵していることから、それらの一部を展示する一室を設け、2日間の会期中、大会参加者に閲覧していただけるようにしました。宇野雪村、西林昭一といった諸先生方からの寄贈品をはじめ、和漢古今にわたるさまざまな書をご覧いただくことができたものと思います。

そして、2020年に東京国立博物館で開催した第30回大会以来となる懇親会も、学内の生協食堂で開催することができました。参加者は70名を超え、4年ぶりに会員相互の親交を深める機会となりました。会の途中、福田哲之氏から、学会草創期の様子や研究者としての姿勢についてお話しいただきました。西林昭一先生や杉村邦彦先生といった学会を牽引された先生方が相次いで長逝され、否応なく世代交代の進む時代に、常に原点を見つめ直しながら歴史を積み重ねることの大切さを再確認しました。

開催にあたって、関係役員皆さまのご尽力がありました。とりわけ、菅野智明副理事長の行き届いたご配慮、ご努力があったことは特筆に値します。また、準備段階から大東文化大学大学院生、学部生の惜しみない協力があったことも記しておきたいと思います。書は大東文化大学にとって欠かすことのできない重要な柱です。34回大会をこうして盛大に開催できたことに心から感謝申し上げます。

（広報局長・会場校責任者）

講演会報告

「翁方綱『孔子廟堂碑考』の検証と補遺」要旨

澤田　雅弘

碑帖研究の泰斗　翁方綱（1733～1818）の虞世南「孔子廟堂碑」研究によって、三井記念美術館現蔵の拓が唐石本の孤拓であること、摹刻（陝西本旧拓）を用いた補填があること、唐石箇所中に描摹があることなどが判明し、後世大いに学恩を受けていることは周知のとおりです。

緻密さにおいて他の追随を許さない翁方綱のことですから、その孔子廟堂碑研究にはほとんど漏れはないだろうと予想しながらも、一度は検証しておきたいと思っていました。数年前に稀覯の『孔子廟堂碑考』全頁がデジタル版で見られることに気づいて、同碑に関する翁説の総覧を作成し、次いで同碑図版について逐一検証を始めました。このたびは、それらの中から気づいた以下の４つ、就中（二）（三）を中心にお話しました。

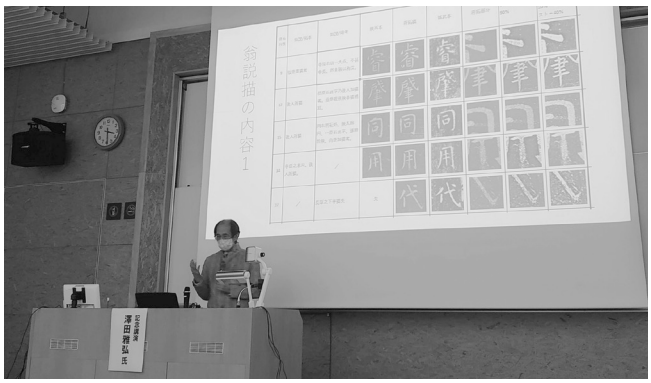
（一）復初斎文稿中の関係記事

翁の主な唐石本研究は『孔子廟堂碑考』『孔子廟堂碑存字』と唐石本中の識語などですが、翁がその研究に精力を傾けたのは「唐石本を目睹して以来、借用して両摹刻（陝西本・城武本）と三旬の間校勘した」と述べるわずか1箇月であったようです。翁が唐拓本を目睹したのは嘉慶12年正月であるとみずから随所に記していますが、復初斎文稿中の一箇所にだけ、嘉慶11年12月と書き残していることに気づきました。しかしその時は「化度・九成と対看」するにとどまったとみられます。が、今後検討を要します。

（二）翁説「描」の検証

翁が「描」と説く当該字の一々について、画像と所説から「描」の内容を検証しました。また翁の校勘記述に見える全ての「墨」義を検討した結果、翁の「描」の観点はもっぱら胡粉類による加工に向けられていて、塗墨は翁の「描」の観点にはなかったと考えられます。

なお検証過程で、唐石本に対する翁の「描」の指摘に遺漏があることもわかりました。城武本・陝西本の両本と唐石本との校勘と画像での点検を併用する方法により、唐石本の筆画に顕著な変形をもたらしたと思われる描摹を検出しますと、「子001・虞003・微008・王021・更024・固028・状030・用092・測092・君094（数字は剪装本行数、以下同様）」など少なくありません。翁がなぜこれらに及ばなかったのか、その理由は改めて考えなければなりません。



（三）翁説「攙補」の検証と補遺

翁が「攙補（移補）」と指摘する「文015・153」「天017・153」「洙021・178」「窮024・070」「體070・155」「與071・080」の6字に異論はありませんが、「攙補」にも遺漏がありました。すなわち「風165・172」「載022・029」「明023・180」「為123・132」「五045・086」「観016・144」「膺016・027」「翦014・085」の8字がそれで、「生029・177」もおそらく攙補であると思われます。

（四）唐拓本中の陝西本にも「攙補」があること

「攙補」についての翁の関心は唐石本にだけ向けられていて、唐石本中の陝西本における「攙補」には言及していません。しかし検証の結果、唐拓本中の「故104」は「故077」を、「能104」は「能052」を、「儒208」は「儒201」をそれぞれ攙補したものであることもわかりました。

広報局

第34回大会シンポジウム報告

書の人文情報学

菅野　智明

本大会のシンポジウムは標記をテーマとし、パネリストに藤森大雅氏、成田健太郎氏、中村覚氏という会員三名を迎え、パネリストによる基調報告と討議、そしてフロアーとパネリストとの討議という構成で実施いたしました（司会は菅野が担当）。三氏の基調報告の概要は、既に「発表レジュメ集」（「大会のしおり」付載）で公表しておりますので、ここでは、さらに要点を絞って記しておきます。

まず、藤森氏の「書道コンテンツのデジタル公開のあり方」では、これまで藤森氏が実践を重ねてきた大東文化大学所蔵の各種書道関係資料のデジタルアーカイブ化について紹介があり、あわせてそれに伴う諸課題や方向性に関する提起がありました。次に成田氏の「碑帖拓本デジタルアーカイブの研究利用について」では、当該のアーカイブ化の現状や、成田氏の関連する研究が紹介されるとともに、原資料所有者、書学書道史研究者、人文情報学研究者という三者の視点から具体的な展望と課題が示されました。最後に中村氏の「デジタルアーカイブ・人文情報学に関する技術紹介」では、成田氏との共同開発により公開されている法帖の類似画像検索システムを例として、ＩＩＩＦやＴＥＩといったデジタル技術に関する国際的な規格やガイドラインについて紹介がありました。

以上の基調報告に続いて、パネリスト三者間での討議、そしてフロアーとパネリストとの討議に移りました。紙幅の関係で、ここでは主たる論点を以下の三点に集約して紹介します。第一に人文情報学へのアクセスについて。関連学会への参加体験や、初学者の学び方などが問われました。特に後者については、現在、専門の学部・コースを有する大学も増えつつあり、一方で勉強会も設けられ、入門書の開発・編纂も進んでいるそうです。

第二に技術的な問題について。基調報告では法帖の類似画像検索が話題とされましたが、その精度や適用範囲を中心に質問が相次ぎました。精度の向上に関しては、正解とすべきデータを予め与えて学習させる必要があり、その学習には書の専門家の介在も必要とのことでした。さらに法帖から肉筆（拓本とは白黒反転）の臨書（書風の隔たり）に対象を拡大する場合、それに応じた試行錯誤が新たに求められるそうです。

第三は、上記とも関わる書学と人文情報学との協働の問題です。各種資料のデジタルアーカイブ化に向けた参画のあり方や、データをめぐる帰属性や権限といった点が問われました。これに対し、上記のような人（専門家）の判断が求められる部分には、プロジェクト等、組織づくりを積極的に進める必要があり、原資料の所有者・管理機関を尊重すべく、ＩＩＩＦといった国際規格への準拠や、画像へのＩＤの付与といった取り組みも重要であることが指摘されました。

この他、フロアーからは原資料の種類（拓本、古筆、印譜等）や分量に応じた公開のあり方、公開の各データベースの連結の可能性、利用者登録の必要性等について、質問をお預かりしましたが、時間の関係で取り上げられませんでした。この場を借りてお詫びいたします。ともあれ、私たち書学書道史の研究に携わる者が、デジタル資料の公開（利用のみならず）について、具体的にどのような形で携わることが可能なのか、今回のシンポジウムではその端緒が幾つも示されたように思います。もちろん、課題も少なくありません。今後、各位（各組織）の積極的な関与を期待するとともに、近い将来、今日からの進展を確認し称え合う機会が訪れることを祈念しております。

（企画局長）

企画局

令和6年度総会報告

事務局

本年度の総会は、令和6年10月26日（土）、大東文化大学板橋校舎中央棟多目的ホールにて行われました。総会に先立ち、菅野智明企画局長の進行のもと大会の開会式が行われ、続いて河内利治理事長より挨拶がありました。

総会は、事務局長の司会で進行しました。最初に、河内理事長より名誉会員・池田温氏、杉村邦彦氏のご逝去について報告がなされ、黙祷を捧げました。審議においては、橋本貴朗会員を議長として進められ、いずれの議案も承認されました。

◆審議事項

（1）令和5年度会計決算報告、事業・活動報告、会計監査報告について　（増田知之会計局長、尾川明穂事務局長、丸山猶計監事）

（2）令和6年度予算案、事業・活動計画案について　（増田知之会計局長、尾川明穂事務局長）

（3）会則改正について　（尾川明穂事務局長）

（4）選挙管理規程の改正について　（尾川明穂事務局長）

◆報告事項

（1）各局報告　（菅野智明企画局長）

①企画局　（富田　淳渉外局長）

②渉外局　（成田健太郎振興局長）

③振興局　（萱のり子編集局長）

④編集局　（髙橋利郎広報局長）

⑤広報局　（増田知之会計局長）

⑥会計局　（尾川明穂事務局長）

⑦事務局

＊総会で配付した書類のうち、〈資料1〉「令和5年度会計決算報告書」、〈資料4〉「令和6年度予算案」（いずれも備考欄を除く）を本ページに掲げました。

令和5年度会計決算報告書
（2023年4月1日～2024年3月31日）

	項　目	決算額
収入の部	個人会員会費	2,436,000
	団体賛助会費	285,200
	大会参加費	152,000
	その他の収入	16,004
	本年度収入　合計	2,889,204
	前年度繰越金	8,211,298
	前年度未払金	△ 2,008,446
	収入合計	9,092,056
支出の部	編集局経費	646,127
	「学会展望」準備費	100,000
	渉外局経費	66,000
	企画局経費	44,000
	大会運営費（企画局）	22,866
	例会運営費（企画局）	0
	講師謝金費（企画局）	100,000
	振興局経費	0
	会報編集費（広報局）	46,761
	ホームページ委託費（広報局）	220,000
	会議費	39,323
	選挙管理委員会費	192,860
	名簿作成発行費	123,970
	通信費	254,637
	事務消耗品費	40,505
	事務委託費	791,780
	会計顧問料	55,000
	東洋学・アジア研究連絡協議会	2,000
	日本書道文化協会	30,000
	予備費	0
	本年度経費　合計	2,775,829
	次年度繰越金	8,187,928
	本年度未払金	△ 1,871,701
	支出合計	9,092,056

令和6年度予算案
（2024年4月1日～2025年3月31日）

	項　目	予算額
収入の部	個人会員会費	2,550,000
	団体賛助会費	400,000
	大会参加費	150,000
	その他の収入	0
	本年度収入　合計	3,100,000
	前年度繰越金	6,316,227
	収入合計	9,416,227
支出の部	編集局経費	700,000
	「学会展望」準備費	100,000
	渉外局経費	80,000
	企画局経費	50,000
	大会運営費（企画局）	300,000
	例会運営費（企画局）	50,000
	講師謝金費（企画局）	150,000
	振興局経費	630,000
	会報編集費（広報局）	60,000
	ホームページ委託費（広報局）	220,000
	会議費	30,000
	選挙管理委員会費	0
	名簿作成発行費	0
	通信費	200,000
	事務消耗品	50,000
	事務委託費	800,000
	会計顧問料	55,000
	東洋学・アジア研究連絡協議会	2,000
	日本書道文化協会	30,000
	予備費	5,909,227
	本年度経費　合計	3,507,000
	次年度繰越金	0
	支出合計	9,416,227

新入会員紹介

事務局

◆一般会員

小川卓治

木村佳史（広島市立広島商業高等学校）

◆学生会員

小掠雄大（皇學館大学大学院）

郭家馨（奈良教育大学大学院）

※令和6年4月～12月に申請された方

2025年度 書学書道史学会例会 研究発表者募集要項

企画局

次年度の例会は、左記のとおり開催いたします。会員各位には、日頃の研究成果を意欲的かつ積極的に発表いただきたく、奮ってご応募ください。なお次年度の例会も外部講師による講演を併催する予定です。

記

①開催日／方法…2025年7月13日（日）午後／オンラインによるライブ配信とします。それに応じたIT機器を扱っていただきますので、ご承知おきください。

②発表者数／時間…3名程度／各30～45分（発表20～30分、質疑応答10～15分）
昨年度と同様に、必要に応じ大会での研究発表よりも発表時間や質疑応答の時間を長めに確保し、議論を深めることも視野に入れています。発表時間は右記の範囲で希望者各位と個別に相談させていただきます。

③申込方法…Eメールにて左記事務局宛にお申し込みください。件名には必ず「書学書道史学会例会発表申込（※発表希望者氏名を付す）」と明記してください。また本文の冒頭に「所属・氏名・連絡先」を記したのちに、発表内容の題目および発表内容の要旨をレジュメ（800字程度）にまとめてご提出ください。

④レジュメ…原則として、パソコン（テキスト形式、Word ファイル形式のいずれか）で作成し、申込時のEメールに、ファイルを添付して送信してください。

⑤申込締切…2月28日（金）必着

⑥発表者の決定と連絡…3月下旬開催予定の常任理事会にて協議・決定し、採否の結果は個別に連絡いたします。

⑦レジュメ集の公開…5月発行予定の『会報』49号にて公開します。この内容はホームページにも掲出いたします。

※注記

・例会の発表者については、学会誌『書学書道史研究』第35号への投稿申込があったものとして扱われますので、改めて学会誌への投稿申込を行う必要はありません。

・学会誌への論文投稿締切は、2026年3月31日となっております。投稿後、原稿掲載の採否は論文査読委員会によって決定されます。

お問い合わせ先

書学書道史学会事務局
〒100－0003 東京都千代田区一ツ橋1－1－1 パレスサイドビル7F（株）毎日学術フォーラム内
TEL：03－6267－4550　FAX：03－6267－4555
メールアドレス：maf-syogaku@mynavi.jp

＊なお、事務局（㈱毎日学術フォーラム内）への電話でのお問い合わせにつきましては、一部テレワーク実施に伴い、後日のご連絡となる場合がございます。
ご迷惑をおかけいたしますが、何卒ご理解くださいますよう、お願い申し上げます。

各局報告

◆企画局

次年度の大会・例会について

次年度の例会は、上掲の「研究発表者募集要項」のとおり開催します。また、大会は10月25日（土）・26日（日）に奈良市の奈良教育大学で開催します。詳細は次号の会報でお知らせいたします。

（局長　菅野智明）

◆渉外局

学会誌33号J-STAGE登載

3月31日に学会誌『書学書道史研究』33号（2023年10月31日刊行）を独立行政法人科学技術振興機構（JST）運営のJ-STAGE（ジェイ・ステージ）に登載しました。論文5件のほか、特集 西林昭一先生のご功労、講演録、学界展望、書評、新刊紹介を掲載しています。

各種イベント・学術会議・展覧会・シンポジウム

奈良国立博物館「空海―密教のルーツとマンダラ世界―」、第68回国際東方学者会議、大阪中之島美術館「醍醐寺 国宝展」、東京国立博物館「神護寺―空海と真言密教のはじまり」、日本学術会議事務局「学術論文等の即時OAの実現に向けた基本方針」説明会、春日井市道風記念館「岡寺版集帖」などの情報をご案内しました。

ご逝去のお知らせ

4月16日に傅申先生（享年88）、6月9日に劉江先生（享年99）、8月31日に何傳馨先生（享年73）が逝去されました。この場をお借りして先生方のご逝去を悼み、心よりご冥福をお祈りいたします。

（局長　富田　淳）

◆振興局

研究促進助成金制度について

2024年度の募集において、研究計画書の申請が4件ありました。審査の結果、左記の2件が採択されました。来年度も多数の応募をお待ちしております。

研究代表者：峯岸佳葉
研究課題名：松下烏石の中国書法の受容の変遷について

研究代表者：浅野泰之
研究課題名：斉白石と日本人士との交流について
―1920から1945年を中心に―

2022年度採択者（仲村康太郎会員）の終了報告書に相当する「経費執行報告書（含む領収書）」を受領し、適正に経費を執行されたことを確認しました。2023年度採択者はいなかったため、「中間報告書」の提出はありませんでした。

学生会員研究発表旅費補助制度について

2024年度より、本学会の大会等に対面参加して研究発表を行う学生会員に対して必要な旅費を補助する制度の運用が始まりました。詳細は本学会ホームページに公開しておりますので、ご参照のうえ該当する学生会員の方はぜひご利用ください。

（局長　成田健太郎）

◆編集局

『書学書道史研究』第34号の刊行について

2024年10月31日付けで『書学書道史研究』第34号を刊行いたしました。論文5編 特集「杉村邦彦先生のご功労」、春日井大会および例会記念講演録、「展望論文」、「書評」「新刊紹介」を収録しております。ご執筆ならびに論文査読をいただきました各位に厚くお礼申し上げます。

『書学書道史研究』第35号編集に向けて

・投稿申し込みは、2024年12月31日で締め切り（要概要送付）ました。

・「書評」もしくは「新刊紹介」…本誌で取り上げるべき書籍の推薦を随時受け付けております。複数の著作候補が届いた場合には、編集局で対象本を検討して決定いたします。

「投稿規定」「執筆要領」改定のお知らせ

『書学書道史研究』「投稿規定・執筆要領」が一部改定され、第34号より新しい規定に基づいて編集を行っております。「論文」「研究ノート」をはじめとする原稿の性格、投稿前の原稿チェックリストなど、従来と異なる点がございます。詳細については、ホームページで公開しておりますのでご確認ください。

投稿にあたっては、最新版「投稿規定・執筆要領」および「別紙様式」に基づき様式に沿って原稿をご作成のうえ、締切期日必着でのご送付をお願いいたします。

（局長　萱のり子）

◆事務局

会則改正について

10月26日に開催された令和6年度総会において、会則の一部改正が承認されました。会員種別の明確化や、本部付き幹事と大会幹事の統合、参事・諮問委員の廃止、賛助会員の特典見直しに伴うものです。なお、この改正は第19期役員会が発足する令和8年4月1日に実施いたします。詳しくは、本学会HPをご覧ください。

選挙管理規程の改正について

同じく本年度総会において、選挙管理規程の一部改正が承認されました。理事・監事に重複当選した場合に理事を優先することを規定し、賛助会員に選挙権を付与するものです。即時改正とし、来年度実施予定の第19期役員選挙より適用いたします。詳しくは、本学会HPをご覧ください。

修了などにより学籍を離れる予定の方へ

本学会では、学生会員の「有期会員制」を導入しています。「会員変更申込書」の提出により一般会員資格の付与などが行われますので、今春に学籍を離れる場合は、必ずご提出ください。「会員変更申込書」は、学会ホームページからダウンロードできます。なお、申込書下部の「紹介会員氏名」「役員推薦氏名」「理事会承認」各欄の記入は不要です。書類送付やお問い合わせは、本会報5面のお問い合わせ先へお願いします。

令和5年度事業・活動報告

4月9日　第1回常任理事会（オンライン会議）
4月23日　第1回理事会（オンライン会議）
5月15日　第45号《会報》発行及び発送
6月1日　「研究促進助成金制度」申請受付（～7日）
6月30日　第33回大会発表申込締切
7月6日　令和4年度決算会計監査
7月9日　第2回常任理事会（オンライン会議）
　　2023年度例会（オンラインライブ配信）
8月20日　第2回理事会（メール会議）
9月15日　《大会のしおり》《大会レジュメ集》発行及び発送
10月28日　第3回理事会(定例)(於文化フォーラム春日井)
10月29日　令和5年度総会（於文化フォーラム春日井）
10月31日　第33回大会1日目(於文化フォーラム春日井)
12月22日　第33回大会2日目(於文化フォーラム春日井)
12月31日　第34号『書学書道史研究』発行及び発送
1月15日　第4回理事会（メール会議）
2月1日　第46号《会報》発行及び発送
2月28日　第34号『書学書道史研究』投稿申込締切
2月29日　第17期名簿・第18期役員選挙投票通知発送
3月3日　第18期役員選挙投票締切
3月17日　2024年度例会発表申込締切
　　選挙選出理事による緊急懇談会
　　第17期・第18期新旧役員合同理事会
　　（オンライン会議）
3月31日　第34号『書学書道史研究』投稿原稿締切

令和6年度事業・活動計画

4月21日　第1回理事会（オンライン会議）
5月15日　第47号《会報》発行及び発送
6月1日　「研究促進助成金制度」申請受付（～7日）
6月20日　令和5年度決算会計監査
6月30日　第34回大会発表申込締切
7月7日　第1回常任理事会（オンライン会議）
　　2024年度例会（オンラインライブ配信）
8月20日　第2回理事会（メール会議）
9月13日　《大会のしおり》《大会レジュメ集》発行及び発送
10月26日　第3回理事会（定例）(於大東文化大学)
　　令和6年度総会（於大東文化大学）
10月27日　第34回大会1日目（於大東文化大学）
10月31日　第34回大会2日目（於大東文化大学）
12月20日　第34号『書学書道史研究』発行及び発送
12月31日　第4回理事会（メール会議）
1月15日　第35号『書学書道史研究』投稿申込締切
　　第48号《会報》発行及び発送
　　（以上は執行済み）
2月28日　2025年度例会発表申込締切
3月23日　第2回常任理事会（オンライン会議）
3月31日　第35号『書学書道史研究』投稿原稿締切

（局長　尾川明穂）

令和６年度本学会関係者科学研究費採択一覧

広報局

・基盤研究（S）継続（令和３～）シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷―農耕都市空間と遊牧民世界の共存―　福井淳哉（帝京大学）※代表：山内和也（帝京大学）30,810 千円
・基盤研究（S）新規　史料データセンシングに基づく日本列島記憶継承モデルの確立　中村覚（東京大学）※代表：山田太造（東京大学）31,330 千円
・基盤研究（A）継続（令和２～）「奈良朝勅定一切経」の総合的研究―漢文仏教テクストの資料的基盤の再構築に向けて　赤尾栄慶（国際仏教学大学院大学）※代表：落合俊典（国際仏教学大学院大学）7,150 千円
・基盤研究（A）継続（令和２～）コンテキストに応じた人文科学データパッケージ化に関する研究　中村覚（東京大学）※代表：山家浩樹（東京大学）6,630 千円
・基盤研究（A）継続（令和３～）漢文大蔵経の文献学的研究基盤の構築：『大正新脩大蔵経』底本・校本DBの活用と拡充　中村覚（東京大学）※代表：會谷佳光（公益財団法人東洋文庫）8,970 千円
・基盤研究（A）継続（令和３～）断片的史料情報の集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史料学構築研究　中村覚（東京大学）※代表：西田友広（東京大学）4,680 千円
・基盤研究（A）継続（令和４～）荘園絵図調査・解析方法に関する総括的研究と汎用的な歴史地理情報への応用研究　中村覚（東京大学）※代表：井上聡（東京大学）11,440 千円
・基盤研究（A）継続（令和５～）大型慈図類のデータ構造化と関連史料の連携による南西諸島「海上の道」の復元的研究　中村覚（東京大学）※代表：黒嶋敏（東京大学）11,440 千円
・基盤研究（A）新規　作品誌の観点による半島由来仏教文物の包括的研究―彫刻・絵画・写経を中心に―　板倉聖哲（東京大学）※代表：井手誠之輔（九州大学）8,970 千円
・基盤研究（B）継続（令和２～）中国書画における題跋等の付属資料に関する総合的研究　代表：富田淳（独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館）分担：六人部克典（独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館）、鍋島稲子（独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館）2,860 千円
・基盤研究（B）継続（令和３～）「水墨画」と「彩色画」―1945年以降の東アジアにおける絵画表現に関する調査研究　板倉聖哲（東京大学）※代表：荒井経（東京芸術大学）3,770 千円
・基盤研究（B）継続（令和３～）デジタル文学地図の構築と日本古典文学研究・古典教育への展開　中村覚（東京大学）※代表：飯倉洋一（大阪大学）2,600 千円
・基盤研究（B）継続（令和４～）日本近世史料学の再構築―基幹史料集の多角的利用環境形成と社会連携を通じて　中村覚（東京大学）※代表：杉本史子（山田史子）（公益財団法人東洋文庫）5,070 千円
・基盤研究（B）継続（令和４～）戦前・戦中の報道写真を用いたストーリーテリング・デジタルアーカイブのデザイン　中村覚（東京大学）※代表：渡邊英徳（東京大学）3,380 千円
・基盤研究（B）継続（令和４～）前近代日本の「万国人物図」群が示す人種観と世界観に関する総合人文学的研究　成田健太郎（京都大学）※代表：杉浦和子（京都大学）5,330 千円
・基盤研究（B）継続（令和５～）近世日本の学知と家伝史料：荻生家旧蔵史料と水戸徳川家旧蔵史料を中心に　金子馨（公益財団法人出光美術館）※代表：高山大毅（東京大学）2,990 千円
・基盤研究（B）継続（令和５～）文化史資料としての抄物の研究　近藤浩之（北海道大学）※代表：蔦清行（北海道大学）2,990 千円
・基盤研究（B）継続（令和５～）人文学の研究方法論に基づく日本の歴史的テキストのためのデータ構造化手法の開発　中村覚（東京大学）※代表：永崎研宣（一般財団法人人文情報学研究所）5,850 千円
・基盤研究（B）継続（令和５～）「探究的な学習」の指導ができる小中学校教員の養成方法の開発と効果検証　樋口咲子（千葉大学）※代表：小山義徳（千葉大学）2,600 千円
・基盤研究（B）新規　中国近世における考証学の発展に関する基礎的研究　近藤浩之（北海道大学）※代表：水上雅晴（中央大学）3,380 千円
・基盤研究（C）継続（令和３～）在日コリアンハンセン病回復者・超高齢者コホートによる被差別経験と健康影響の解明　金貴粉（津田塾大学）※代表：文鐘聲（畿央大学）390 千円
・基盤研究（C）継続（令和３～）東アジアにおける書教育に関わる教員養成学構築のための比較研究　草津祐介（東京学芸大学）※代表：加藤泰弘（東京学芸大学）390 千円
・基盤研究（C）継続（令和３～）比較書学教育研究に基づく左利き者に有効な書写学習モデルの開発　小林比出代（信州大学）520 千円
・基盤研究（C）継続（令和４～）日本・アジア美術史のオーラルヒストリー・アーカイヴの構築と公開　板倉聖哲（東京大学）※代表：塚本麿充（東京大学）1,430 千円
・基盤研究（C）継続（令和４～）教科通底的な力を養う書写書道教育の実践的研究―教員の「学び観」形成を軸にして　萱のり子（奈良教育大学）390 千円
・基盤研究（C）継続（令和４～）小学校入学時の書字における課題の解決に向けたプログラム開発　齋木久美（茨城大学）1,300 千円
・基盤研究（C）継続（令和４～）清代の書論における図譜の展開の基礎的研究　髙橋佑太（筑波大学）780 千円
・基盤研究（C）継続（令和４～）小学校国語科書写における硬筆・毛筆動画教材および授業モデル解説動画の作成　樋口咲子（千葉大学）1,300 千円
・基盤研究（C）継続（令和４～）江戸期における右字系筆順と左字系筆順の書き分けの合理性に関する研究　松本仁志（広島大学）520 千円
・基盤研究（C）継続（令和５～）仮名資料の表記の実態と故実書との相関性の分析に基づく表記意識の通時的研究　家入博徳（ノートルダム清心女子大学）1,040 千円
・基盤研究（C）継続（令和５～）黒川家旧蔵資料の調査研究―江戸から明治期の〈知〉の流通と古典学の学術体系の解明―　家入博徳（ノートルダム清心女子大学）※代表：江草弥由起（ノートルダム清心女子大学）1,300 千円
・基盤研究（C）継続（令和５～）上古中国語アスペクト研究―有標形式と無標形式が表現する文法的意味　大西克也（東京大学）910 千円
・基盤研究（C）継続（令和５～）近代日本の炭鉱・監獄・遊郭・ハンセン病施設での労働のインターセクショナリティ研究　金貴粉（津田塾大学）※代表：徐阿貴（福岡女子大学）1,560 千円
・基盤研究（C）継続（令和５～）草仮名中字古筆および草書を用いた大学における大字仮名作品制作指導の研究　久保田陽子（岩手大学）130 千円
・基盤研究（C）継続（令和５～）センシングシステムを活用した手書きメモ取り過程と話の理解に関する実証的検討　鈴木慶子（長崎大学）650 千円
・基盤研究（C）継続（令和５～）「なぜ、理解できないのか」―つまずきのプロセスに関する実証的研究―　鈴木慶子（長崎大学）※代表：劉卿美（長崎大学）2,340 千円
・基盤研究（C）継続（令和５～）『三国志演義』簡本系版本の成立と分化の過程　中川諭（立正大学）1,300 千円
・基盤研究（C）継続（令和５～）近世における入木道の受容と普及に関する書記史的研究　宮本淳子（東京学芸大学）130 千円
・基盤研究（C）新規　坂東本『教行信証』の書写過程と言語の相関を巡る基礎的研究　赤尾栄慶（国際仏教学大学院大学）※代表：宇都宮啓吾（大阪大谷大学）1,300 千円
・基盤研究（C）新規　東アジア書教育史的視点からの文字文化の研究と教材開発　代表：草津祐介（東京学芸大学）分担：杉山勇人（鎌倉女子大学短期大学部）2,470 千円
・基盤研究（C）新規　美術商・博文堂の研究―中国書画碑帖の日本流入の実態　下田章平（相模女子大学）1,170 千円
・基盤研究（C）新規　『エミール』関連手稿群の分析にもとづくルソーの道徳思想形成に関する文献学的研究　中村覚（東京大学）※代表：飯田賢穂（筑波大学）1,040 千円
・基盤研究（C）新規　『説文解字』における書体の認識　山元宣宏（宮崎大学）1,950 千円
・特別研究員奨励費　継続（令和４～）帝国日本における「植民地台湾・朝鮮書道史」の成立とその展開―自主・協力・抵抗　柯輝煌（東京大学）500 千円

＊本会会員の採択課題に限ったが、会員が研究分担者で、研究代表者が非会員である場合には、※を付して代表者を末尾に付記した。複数の会員が関わる同課題に関しては、当該課題のもとに代表者と分担者とを併記した。所属の後の数字は、令和６年度のみの補助金の配分額。なお、新型コロナウイルス感染症の影響により、事業期間を本年度まで延長した課題については、ここに挙げていない。

談話室

「ともに見る書画
—愛好家たちのまなざし」展

笠原　綺華

勤務先のふくやま書道美術館では、2月14日（金）～3月30日（日）の間、冬の所蔵品展Ⅱ「ともに見る書画—愛好家たちのまなざし」を開催いたします。

当館の所蔵品は、福山市出身の書家・栗原蘆水が長年にわたり蒐集したコレクションが根幹を成しており、歴代の所有者や過眼した人物の題跋や箱書などを伴うことが少なくありません。

本展では、巌谷一六や江馬天江、長尾雨山らの添書がのこる祝世禄の草書軸をはじめ、呉昌碩や李瑞清、鄭孝胥が題跋を寄せた許友の書や、犬養木堂旧蔵の硯や墨などをご紹介いたします。作品を取り巻く歴史文化や人々の思いを紐解きながら、まるで作品をともに見るように、書画文房の世界を深く味わっていただければ幸いです。

書の人文情報学とデジタルアーカイブの可能性

中村　覚

私は現在、デジタルアーカイブの構築や、それらを活用した人文情報学の研究に取り組んでいます。こうした取り組みでは、書学や人文学の専門家との協働が重要であり、その中で得られる知見が研究を深め、新たな視点を広げる契機となることを実感しています。

例えば、法帖の類似画像検索システムでは、ＡＩ／機械学習や画像共有のための国際規格を活用し、書風の比較や臨書の研究に貢献する可能性が示されています。一方で、データの作成や活用には専門的な判断が欠かせません。

今後も多くのご指導を仰ぎつつ、学術研究やその支援に努め、デジタル技術を通じて新たな可能性を探求していきたいと考えています。

印譜字書

滑田　一輝

印の創作に際し印譜の鑑賞は欠かせない。時に刻す印文中の一文字の造形を求めて数多の字典や印譜を捲る。学部の学生の折、師より小林斗盦の印譜字書を作ったら?と言われ、卒論の資料として印譜字書の作成に手を付けた。求める字を含む印影を索引で検出できる印譜字書である。過去の資料より網羅的に印影を収集、印文数ごとにコピー、親字ごと説文順に封筒に入れて並び替えた。印影ごとの章法が確認できるよう文字単体で切り離さず、印影全体を各字の欄に掲載、数年を使い完成させた。糊とハサミを使いアナログ方式で作成した手応えが今でも創作の肥やしになっている。古璽や鄧派関連の新しい資料の整理をしたいと思う今日この頃である。

「黄道周記念館」を訪ねて

万　恬甜

昨年帰国の際に、福建省漳浦県に所在する「黄道周記念館」を訪ねた。「黄道周記念館」は、曽て「黄道周講学処」の「明誠堂」の旧跡で、館内に立てられた「天方盤」は名高い。故杉村邦彦先生も昭和63年に「黄道周記念館」を訪れた見聞を記した「福建に黄道周の遺跡を訪ねて」の一文がある。黄道周の多くの書作はここで制作され、「書於天方堂中」と落款に記した。8月、読売新聞社、読売書法会が主催する特別展示「名品でたどる文字文化、書の歴史」で、2点の黄道周の書蹟が展示された。書蹟の前に立ち、彼が揮毫した時の情景を想像しながら、遠く福建での足跡を思い浮かべると、「一瞬の古人との対話であろうか」と感慨深くなった。

編集後記

◆17年ぶりに黒川古文化研究所を訪れました。書道全集掲載の「王澍臨米芾蜀素帖」を初めて見ることができただけでなく、同一法帖を臨書した梁巘の作品を並べて展示するなど、玄人好みの展示でした。なかでもまさに逸話通りの極小の翁方綱の蝿縄書に目を奪われました。（髙橋佑太）

◆毎年12月になると書道部の学生に年賀状の書き方を指導しています。ただ練習するだけでは物足りないと、所蔵する昭和期に活躍した書家の葉書を持参しました。書が実用の延長線上にある芸術であることを再確認する有意義な時間となりました。（藤森大雅）

◆記念講演の文字起こしを担当している最中、澤田先生のこういった話が来年度から大学で聞けないのだと思うと寂しくなってしまいました。私の大学生活の中で間違いなく一番お世話になった先生。先生から学んだことを大切に今後も研鑽に励みます。本当に有難うございました。（村田　萌）

◆千葉県の高校書道部会と書写部会との合同研修会で、近現代の千葉県の書写書道教育について考え直す機会を頂きました。学校教育と社会教育とが交差する場は、豊かな地域性と伝統によって育まれていることが改めて理解できました。（髙橋利郎）